

湿地・田んぼに赤トンボやメダカが消えた？

*Did a Red Dragonfly and Killfish Disappear
in Damp Ground, the Rice Field ?*

岩崎行伸*

「夕焼け小焼けの赤トンボ」や「メダカの学校は川の中」で始まる童謡「赤トンボ」・「メダカ」は、われわれ日本人に最も親しまれた童謡である。初夏の田植の頃に小川や池溜まりにはメダカがスイスイと泳ぎ(絶滅危惧種)、秋の夕暮れには赤トンボが舞う情景、日本人の心の現風景を想像できるのは70代半ばの熟年齢であって、若い人に想像してほしいというのは無理・難題であろう。とりわけ・里山に住む人たちにとっては初夏から秋にかけて欠かせない風物誌だった。そんな光景は国内の殆どの農村・湿地・田んぼで、過去のものとなり、赤トンボが消えてしまった。

メダカの学校は川の中にあり川といっても流れが緩やかな小川や田んぼの側道・水路である。そこにメダカはタモ網で掬えるくらい群れていた。体は見るからに小さくて弱々しい感じがする。日本の淡水魚の中で最も小さいから、そういう印象は仕方ないが、水の張った池でも40℃位の温水の中でも生きられる。海水の中でも、少し位汚れた水の中でも正常な、見かけによらず強い魚である。今でも、小川&田んぼや水路には若干残されているが、そこにはメダカが産卵する水草がないことと、流れの早いコンクリートの水路や小川、化学肥料の使われる田んぼとなっている。

夏休みには、高原等に行くと赤トンボが顔面に飛び込むほど沢山いた。赤トンボの代表であるアキアカネは、平地や田んぼなどの止水域で産卵する。冬を越して春になると卵から幼虫(ヤゴ)になり、ミジンコなどを捕食して成長し、6月下旬から7月下旬にかけて羽化を始め、成虫(トンボ)になる。小さな虫を捕食して成長したアキアカネは、7から8月の盛夏を涼しい標高の高い山岳地域へと移動し過ごし秋になると湿地・田んぼに降りてくる。体の色合いは赤味を増してゆく。赤いのは雄であり、雌はニンジン色となり、性別が区別できる。

体の赤いトンボを「赤トンボ」というが、斑紋などに差異があって、実は20種類の総称である。例えば、ショウジョウトンボ(静岡/麻機湿地)ナツアカネ・アキアカネ(静岡/吉田川)・マユタテアカネ(静岡/駿府城公園,遊木の森)・ヒメアカネ・ミヤマアカネ(静岡/猪之頭公園,遊木の森)・ネキトンボ(静岡/吉田川/庵原川)・ウスバキトンボ(静岡/麻機湿地、馬走/清水)等を夏から秋に目視観察される。

棚田の赤トンボ・メダカが消えた



図1. A: 棚田の景観 (2005.06, 菊川/静岡)、B: アキアカネ、
C: メダカ
Photo by Y. IWASAKI

赤トンボの仲間たち（静岡）



D



E



F



G



H



I

図2. 赤トンボ仲間、D: ショウジョウトンボ（麻機湿地）、E: マユ
タテアカネ（日本平運動公園）、F: ノシメトンボ（遊木の森）、
G: ミヤマアカネ（遊木の森）、H: アキアカネ（麻機湿地）
I: ネキトンボ（庵原川）

Photo by Y. IWASAKI

ところで、アキアカネは平地で羽化したものが高原で性成熟し、赤くなって湿地や田んぼに戻るとされていた。近年、全てがそうでなく、平地で羽化しそのまま里山で暮らすタイプもあることが分かった。これは体に印を付ける方法（マーキング）が改良され、個体識別したものを再捕して移動・経路を知る調査がより正確に行われるようになったことによるが、何故、高原に行く個体と里山で暮らす個体に分かれるか、未だ明らかでない。

メダカは身近で菊川（静岡）の棚田地の田んぼで、麻機湿地（静岡葵）で生息を確認。このメダカの産卵期は4～8月、春に孵化したものが夏に産卵するほど成長は早い。自然界の寿命は略1年であるが、水槽飼育すると、それ以上生きることもある。

赤トンボやメダカが、なぜ湿地&田んぼから消えてしまったのか。それは減反政策で水田が減少したことや、水の調整が自由にできる乾田が増え、田んぼの水を抜く「中干し」がヤゴの羽化の6月頃に行われるようになったこと。このような変化が、中長期的な要因として考えられている。他は地球温暖化の影響で夏を過ごす場所が減少したり、競合する生きものたちが増えたりしたことが影響しているという。また他の研究によると、メダカや赤トンボの激減の主要因は農薬の使用による田んぼや小川・湿地に流水が生きものたちの発生・羽化・孵化・成長に関係していることが考えられる。

参考文献

- 1) 自然大博物館（1992）：昆虫・淡水魚、小学館、相賀徹夫編集
- 2) 富士山と生きものたち四季の魅惑（2003）：黒船印刷、岩崎行伸著
- 3) 赤トンボやメダカがいた日々（2009）：海鳴9号、東海大海水研OB会）、岩崎行伸著
- 4) 新農薬による大量死を引き起こす（2013）：現代化学10月号、山田敏郎著
- 5) 光と影と彩の旅へ（2014）：Yahoo My HP、岩崎行伸編集
- 6) 美しい日本の四季・景観と生きものたち、2014, 2015）：yahoo blogs、岩崎行伸編集

添付資料

図1. 田んぼの景観と赤トンボ（アキアカネ）とメダカが消えた？

図2. 赤トンボの仲間たち（静岡）、ショジョウトンボ・マユタテアカネ・ノシメトンボ・ミヤマアカネ・アキアカネ・ネキトンボ。

*会員：自然観察研究会・塾長（四季景観と生きものたちの記録）